

公開競争演説を聴く：雑録

著者	無外寒生
雑誌名	龍南會雑誌
巻	1 4 0
ページ	6 6 - 9 3
発行年	1911-03-25
その他の言語のタイトル	公開競争演説を聴く：雑録
URL	http://hdl.handle.net/2298/6213

公開競争演説を聴く

無 外 寒 生

吾人は競争演説を好まず演説を好まざるに非らず競争演説を好まざる也、競争の二字既に不快の感を與ふるに之を演説に冠するをや。演説は自己衷心の襟懷を訴ふる所以のもの、襟懷を吐露すれば則ち足る。演者が演壇に立つや彼は自己の襟懷を叙ぶるの外何等他あるなし、其の語勢も其身振も演者自身の熱誠の發露と見てこそ興味もあれ、之を競争の二字の爲めに演壇に立ち競争の二字の爲に抑揚し身振するとせば吾人は直覺的に劇場の役者や浪花節語りと其徑庭甚だ遠からざるを覺ゆ。演説の眞意義豈に競争なるもの、存在を認めむや。

吾人は演者諸君が競争の二字に何等威嚇せられざりしを信す、されど聴者の眼よりは遂に競争の字を抹殺する能はず、吾人も亦その一人也、ただ抹殺する能はざるを強いて抹殺して其の席に列せり、吾人が眼中固より競争の不快文字無し、従つて單に各人につき妄評を試みたるのみ其の甲乙其の優劣に至つては敢て吾人が試みんども欲せざりし所蓋し競争演説に對する吾人の所感が如上の点に存するを以て也、

○開會之辭

宇 佐 美 部 長

部長立ちて先づ來賓並に滿場の聴衆によりて本會一層の盛況を呈すべきを謝し今夜此の演壇に立たむとする辯士に言及して曰く今日の演説は青年の演説にして世に直に賣らんとし行はんとするものに非ず市場に出さむ爲にあらすただ彼等の言はんと欲する所を卒直に語らんと欲するのみ、欠点は馴れたる人にも到底免れ

得ざる所之を彼等に見出すは實に己むなきに出づ、語を來會諸君に寄す願くはこの未成品——青年演説の青年演説たる未成品に同情し誘掖し開發せられむ事を。序言す今夜昇壇の順は一に抽籤によりて決し何等の意を用ふる所なかりしを。と。

直に演説に入る。

第一席　力の人（二十一分）

二部三年甲　南種　康博　君

拍手裏に迎へられて壇に上る、拍手收り後は滿場只寂、幾百の視線は等しく壇上の一点に注がれ幾百の聴衆は等しく耳を聳てゝ競争演説の第一聲が如何なる意味を齎して響くやを注意せり、演者は何を語らんとする乎、

地球は回りにて止まる時なく水は流れて窮まる所を知らぬ、風は習々として吹き雨は沛然として降る、日は照り月は輝き而して星は燦として瞬く、鳶は飛び魚は躍る、花は咲き又萎む、多くの人類其間に生れ或は飲み食ひ或は笑ひ泣き或は思ひ行ひて終に死ぬる是を宇宙の常態となす而して吾人は偉大なる力其間に働き萬有皆之によりて充たされ而して吾人は其の力をうけて居ることを認むるものである、

言は直に本題に入れり、萬有引力を挙げ熱を挙げ是等が吾人の肉体上に及ぼすを説き更に話頭を起して外界が吾人の精神上に與ふる力の大なるを述ぶ。三笠の山に出でし月は煙波萬里を隔てゝ如何に唐土の留學生を泣かしめしぞや、ユダヤの空を飾りし星の光は牧羊者の心にいかに美しく感ぜられしぞや、マーデン、ジョシマートシャルの言を引きて此の力を稱し且つキリストに言及して曰く

キリストの故郷ナザレの村は花靜かに草柔き地上の樂園であつた、ルナンの語る所に従へばこの土地の春
 開けて三月四月の候に至ればたどしめなき清明の色その花にあらはれ葉蔭に憩ふ獸類の小さげに温和なる
 或は山鳩の雅びたる青鳥の輕げに草の葉を曲げてその上に止るなど坐ろにまだ見ぬ人の遊志を誘ふといふ
 事である、斯る間に包まれて三十年を送りたる彼キリストは當然類稀なる詩人であつた其の説教に用ひた
 る譬喩は其材料甚だ豊かなるものがあつた、羊躍り鳥歌ふガラリヤ湖畔の丘の上、行雲流水の影野花青草
 の匂うつろいて云ふべからざる清新の趣は彼が教の新しきと相待ちて純朴なる聽衆の心に直ちに生命の教
 を植つくる事が出来た。

更に曰く大なる力は人より人へ流る、楠氏の忠節は如何、ナイチンゲールの慈愛は如何、松下村塾は如何、
 三田義塾如何 ステバノ、ポーロ如何 何れも確然として力の感化を立證する也と、演者は一步を進めて曰

多くの力四邊に充ちて吾人が獲得に任せて居るしかし乍ら多くの人は敢て之を求め様とはせぬ故に彼等は
 何時までも力の乏しきを嘆せねばならぬ、故に吾人は進んで之を獲得し之を以て尙多くの力を集め集め得
 たるところを以て已を修飾し發展し國家社會の爲に働かねばならぬ 於是乎吾人の生涯は意義あるを得偉
 大なるを得るのである、今世間を見渡すに多の人は兎に角働いて居る其方向其分量其目的區々別々である
 が學者の言明す處吾人が信する所人生究極の目的は單一にして區々ではない 力學の法則は教へて云ふ「
 若干の數の力の合成力はそれらが同方面にありて平行なるとき最大である」と 即ち國民擧つて一致協力
 するとき其國榮へ將卒力を一にして奮闘するとき其軍必ず勝つのである、

翻つて吾邦の現状や如何、力ある科學者ありや、力ある文學者ありや、力ある道德家ありや、偶ま新思想を號するもの出づるも不忠不敬漢のみ、吾人は「力の人」の出現を渴望す、否、己も起つて力の人たらざるべからずと慨し最後に曰く

我祖國祖先の墳墓の地吾人はあらゆる手段を盡して之を發展せしめなければならぬ乍然ビラミッドは一石の造る所ではない兎狩は一人でやれない多くの同胞吾人と力を平行にして力を獲得活用して同じ目的の爲に盡さむことを熱望して止まぬ所である

吾人は學に於て德に於てあらゆる方面に常に己が力の足らざるに泣き日夜之を得んと祈り且努力して居る吾人の前途は豫知する事は出来ぬ併し如何なる困難が來るとも吾人は幸にして豊かなる力の泉を有しいかにして力を得るかの道を知るが故に力の人となり日本の發展の爲に盡し終に究極の目的に到達せむが爲に「夫のロングフエローの詩に表れた青年の如く常に新しき元氣を以てエキセルシヨアと叫びつゝ上へ」に進まんとするのである、(終り)

○人を動かす演説に二種あり、一は慷慨激越聽者を衝動し興奮するもの、他は冷語沈聲一言一句人をして熟考せしめ沈思せしむるもの、後者の人を動かす寧ろ前者に勝ると雖も之を下手に使はん乎只徒に平淡無味に陥り聽者をして何等の感興をも得ざらしむ、演者の「力の人」なる一題を提げて演題に立つや其の何れを採りしかを知らずと雖も吾人の視る所によれば演者は後者を學びて其の弊に陥りたるものに非るなき乎、論を立つるや組織的、言語を擇ぶや亦其當を得たり、而も之を吐露するに當りてや平々淡淡抑揚な餘音なくゼミヤミヤなく恰も白湯を呑むの感あり、是れ果して演者の豫期せしところ乎吾人は甚だその演題に相當たら

ざるを惜む、自ら演説するの如き、最も要する要素は、演説の材料、演者は頗る言語の洗練に意を致せしに似たり前に述べしギリスタの一節の如き人をして何となくナザレを想はしむ、然れども遂に是れ文章のみ、文章は演説用の言語として必ずしも適應せず却て人をもて多少の情感を抱かしむるを如何せん、加之演者動もすれば文章朗讀流に陥りナザレの和かなる景色を述ぶる時も、我國に現今方の人の存在するやと慨する時も其の語勢に於て其の態度に於て何等の變化をも認めず、是れ果して演説の上乗乎、吾人は何となく拍子抜けの氣味なき能はず、之を演題の性質より見るも決して聴衆を感動せしむる能はざるものと云ふ可からず、若し人を鼓舞感激せしむる点より論せば今日の演題中吾人はこの「方の人」なるタイトルをその唯一とするに躊躇せず、而も豫期は反せり、演者はあまりに自重せりこの演題を以てしてこの内容を以てして遂に多大の成功を收むる能はざらむ、由來此種の演説は其の最大の要素として熱誠を有せざる可からず、彼は熱誠を有せしならむ、たゞ之を表露するに其の術を欠ぎ一見蠶の糸吐きの感あらしめ人をして演者自身深くこの力を確信し憧憬するの念ありや否やを疑はしむ、其立論に於て其の内容に於て其の演題に於て既に爆發力を有す、惜むらくは之に点すべき一点の星火を欠ぎ冲天昇騰の壯なくして空しく地上の塊石と何等異なる所なくして横たはりしを、

第二 席

我等のトーン (三十二分)

二部三年甲 下 田 克 巳 君

昇壇直に本題に入る、今や我國は列強に伍せり嘗て誘掖と指導とを以て我に接せし列國は今や猜疑と嫉妬とを以て我に對し獨乙皇帝は我留學生を文明の探偵 Kultur Späher と稱し各製作所に我も其の堂奥の開扉

を欲せず、此時に當り我等は決して彼等の糟粕を嘗むる要なしと遠大の目的に向つて新機軸を出さんのみ何を以て之に應ずるを得ん乎と云ひ

吾等は此の遠大なる目的に向つて頭を突きこみぐんぐん進む事が出来る様に其の日常を整ふる要がありま
す茲に私が切に感じまするは吾等の調子即ち吾等のトーンを高めて如何にも大きく響く様に心掛けたらば
といふことであります吾等の感情の調子が仲々して如何にも大きく知的活動の調子が統一して敏活なる様
に努め之に生氣潑瀾たる活力を添ふる事に努力せば吾人の日常が直ちに目的に向つて發展する様に出来る
と思ふのであります、

大統領ガ・フィールドを挙げ其の調子高き感情は其の教師時代にては望郷に泣ける一青年を感化し其の大統領
時代にては一世を風靡したるを説き次に知的活動の調子を述べ其の例としてクラスの授業に及ぶ
一室に四十人も犇々つまつても講義となれば静かになります講義が進むにつれ知的活動は愈敏活になり
深く／＼廣く／＼新に開發して身につく様に覺えますたとへ頭腦が沈滞して居ても雲を拂ふ如くその蟠り
が取れて清々する様になります、科學に語學に先生の慈容は心にしみ時折のユーモアは快き反響を與へ
て吾等の知的活動が増進せられます不愉快なく妬なく名なく憂なく邪なく我等の調子は愈高調に達するの
であります

次に友人間に於ては如何、我等は未だ世情に對して苦がき經驗を有せず隨て兩者の間牆壁なく心奥より湧き
出る感情の常に其間を繞るを見ると云ひ、次に一轉語、青年は自由なりと叫び、吾等は外に掣肘なく内に障
害なく山野の跋涉高吟心の儘なり吾等は之を感謝せざる可からざると共に更に自己の境遇上種々の調子に微

細の注意を要すとて且之を詳叙して曰く、吾等が先輩の如く、
出あらゆる社會に接しますれば吾等は殊に普通の人に接する場合が最も多いのであります此等の人と我等と
大は多少調子の相違もありますので最初はブライドが働きますけれども次第次第に心弛みブライド薄らぎ遂
は種々の欲望が働き共に快樂を共にせんとして積極的に非常の勢力を添へ共鳴は意外の邊まで進むのであ
ります之に反して調子の高い人に接する時は此の共鳴が極めて困難であります、力もなくトーンも低い癖
に動もすれば其の偉人に對して批評的態度に出で共鳴などは出来なくなつて參ります、吾等が其人を十分
敬慕するまでにならなければ其人に對する共鳴といふものは出て參りません

此等日常の間にトーンの高調を努めざるべからず抑人類は四邊の境遇に促され向上の努力によりて統一を得
調子の高調を得新しき或力を喚起し息まざる向上發達によりて現今に至れり而して其の何れの点に至りて止
まれば俄に量り難し吾等は是に於て此の最初の未開時代より今日に至るまでの歴史を繰り返す也、と云ひ
更に曰く、

若し良い加減に向上を止むれば昔の狀態に歸る事になります吾人が先輩を見て如何に吾等が彼に劣れるか
を見ては吾等亦尙其處まで發展し得べきものの確信が働き尙それ以上にも統一のやり方一つでは進む事
が出来やうと思ひます故に吾等は吾等の調子を高むる事に大いに力めなければなりません吾人が毎朝澄み
切つた大氣を吸うて緑濃き松影に吾が學びの窓を望む時先づ考ふべきは「吾等のトーンは如何に」
斯くて世界的の發展を期し我が大日本國をして世界人類進化の最先鋒たらしむる様努むべきであります、

○昔者古今集序の撰者が業平の歌を評して「其心あまりで詞たらず委める花の色なりてにはひ残れるが如し」と云ひけむ、其の言葉直にこの演説を評すべし。演者の胸奥十分の藏懷ありたゞ之を吐露するに徒に排刻的に流れ動もすれば秩序相乱れ聴者をして首尾徹貫して聴取せしめ其の意の何れに在するかを知らしむる点に於て憾みなき能はず、聴者に對する演説の不徹底は固より其の内容の性質にも依ると雖も一は懸りて以て論旨の排列、論者の技量に存す、この演説たゞ此の点に事欠きし爲め遂に明瞭の度を薄くせり。

文章語の少なかりしはうれしかりしも語尾のありまじた、非常に耳に障り殊に右手の位置下にも下らず上にも上らざりしは何故にや、一体にゼズチュアもなく抑揚もなかりし爲め往々にして老人よりたる風の見え熱誠の影の閃かざりしは聴者に稍惰氣を興へたり今一息そのトーンを高くし天馬の空を馳る如かざる迄も急端奔雷を響かす位の元氣こそ望まじけれ、

徒に朱面怒號の愚を學ぶを希はざれど宇佐美教授の言の如く未成品の演説のみ、吾人はより以上に元氣ある未成品たらしむことを望む、未成品也故に元氣あり活氣あり本演説の如き前演説の如き仔細に其の内容を檢ずれば決して活元素を欠けるに非ず吾人は死せる原素をも強いて躍らしめよといふ者に非ず活元素は飽くまでも活元素として活潑々地たらしめよと云ふ也、言語の文字に勝れる点こそ在るべく演説の文章に優れば是所以こゝに存すべし、而して吾人が演者に期する所も實に此の呼吸に他ならざるなり、

吾人の第三席（わが神洲の美）（二十五分）

也。

一部三年甲 石田 和吉 君

○演者先づ警狗を吐いて曰く「私の演説は始めは非常に甘のねらぬがありますが噛み砕きれば噛み砕きむる殘

け苦味が出て参ります、例へて申さうならば黒砂糖の様なもので御座りませう」と、鬼か蛇か聴衆は耳を傾けぬ。

吾が神洲に三つの極美ありと喝破し其の第一として國土風景の美を説く、芙蓉峰を擧げ南朝の遺趾をあげ耶馬溪を擧げ松島天橋立琵琶湖袖ヶ濱等を擧げ春花秋月幾多の詩人畫家をして啞然たらしむるを説く

第二の極美として彼は國体の美を稱しぬ、皇祖の遺訓神武帝の創業仁德帝の仁德醍醐帝の寒夜脫衣の御事に感激し更に明治天皇の人民に慈父の愛を賜ふを述べ歷代の聖恩は筆にも舌にも表はすことは出来ないのであります諸君何ぞ我國体の美は美しいではありませんかと結ぶ。

第三の極美として日本人民の忠勇心に富めるを稱して一例として旅順閉塞隊を示し其の局に曰く
中には女房もあらう子もあらう或は年老いた父母もあらうに君の爲には私を忘れ頭の頂きから足の爪先に至るまで一分試しに刻んで見ても海ゆかばみづくかばね山行かば草蒸すかばね、忠義の外は無き物である、この忠義の心は名譽の爲めでもない金鵄勳章の爲めでもない唯御天子様の爲めといふより外はないのである諸君その兵士の心膽如何に美はしいではありませんか、

斯の如く絶景の國土を有し上連綿たる聖帝を戴き下忠良の民にみつる我この神洲であります苟くも生を此地にたくもの奮勵以てその名に背かざる事を覺悟せねばなりません

然るに諸君……………

演者の怒號一聲と共に論鋒は一轉して銳利錐の如く頂門の一針正に神州の腐敗分子に投せられんとす。彼は浦賀の砲聲と共に喜ぶべき文明の潮流は幾多の腐敗せる塵芥を泛べて神洲を襲ひ世の所謂紳士が動もすれば

如上の三美を忘れ或は政治家として鐵窓に呻吟し或は輔弼の相として奇体なる結婚問題を惹起し或は投票の賣買となり或は醫師の不徳行爲となり神州本來の面目那邊に在りやを問ひ銳鋒は再轉し彼は卓を叩きつ

然るに吾人は未來有爲の青年に於て其の例證を見るに至つては又驚かざるを得ないのであります

試みに現今青年學生の狀態を御覽なさい輕薄淫靡の風は彼の兩都より我全國を濡さんとして居るのであります草鞋破帽以て青山白水の地に遊び歴史に地理にあらゆる方面に天授の利を求むるよりは寧ろ午睡を以て快なりとする者も現今青年の中に見るではありませんか、健全なる膝栗毛を有し乍らも一寸隣へ行くにも猶腕車を驅て意氣揚々たるは是れ現今學生の間にも時にある狀態ではありませんか 未だ乳臭き青二才既に衣服の美醜に心を焦し頭にはコスメチックをコテ／＼と塗り立て自然の花を愛せずして物言ふ花を弄びて何等の羞耻を感ぜざるは是れ現今青年の中に全くないとは否定し得ざる狀態ではありませんか 斯の如く天下青年の輕薄に流れ華美に酔へる時に當り由來我國九州男子は流石は荒くれたる熊襲の子孫であつて體軀剛健である故に健脚よく山川の跋涉に勞せず能く柔劍道の激しき動作に堪へ資性質實義に勇み友に厚く國君の仇あらば水火も尙辭せざる健全なる志を有す されば東西の歴史を閲みして深く奢侈游惰の國を危くするを信ずるものは必ずや多大の望を剛毅朴訥なる本來の我九州男兒に屬して居るのである——然るに今や輕薄華美の餘風は餘燼を九州に飛ばし幾多の青年亦流行を追て走りつゝあるを聞き我輩固より其言の僞なることを信じますが兎に角大に警めねばならぬことであります

諸君 抑も我國現今の狀態を觀察して御覽なさい……………。

十九世紀以來 主上を始め奉り幾多忠誠の志士は妻は病床に臥し兒は飢に泣くも一身一家を顧みず遂に全身

の東帝國を燦然たる文化を興へたり、この新天地を滿つて立つべき新責任者は誰ぞや、第二の日本國民第二の社會組織者第二の國家の干城たる青年が荷へる責任重大ならずやと叫び演者は更に貌を正しうして昨年の今頃高崎正風男が、聖土の御前に伺候して奏端なくも現今學生に及び男は恐懼措く所なく其の平日の見聞のまゝを申上げしに、聖土には龍顏ささ變らせ玉ひ國家の爲慨すべき旨のちせ給ひし趣を語る、演者の聲威極まつて慄ひ滿場また水を打てる如し

諸君 希望を意氣とに充滿せる諸君、假令天下學生は斯く墮落すとも我九州男子即ち猶剛健質朴の氣風を有し天下學生の模範たる諸君、試みに益大の活眼を開いて刻下大局の形勢を見よ、今乾坤春海洋洋たりとは云へ水中の大魚躍つて一度怒濤澎湃の時來らずしては止まないのであります而して其の累何處に來るや計るべからざるものであります、如此危急の秋に當りてどうして安閑放逸たる事が出來ますか、諸君吾人は迷へる夢より醒め而して東洋櫻花國の氣魄を發揮し愛國の二字を肝に銘し一致の精神を忘れず、邦國の前途を富岳の安きに置き人民をして春の海の穩かなるに至らしめばなりません是が吾々青年の任務であります目的であります將た使命であります之れ即ち百年の長計と吾人が渴望して止まぬ所であり、〇滔々二十五分間演者は其の熱誠を披瀝して靜に壇を上る、滿腔の鬱懷彼は披瀝し盡したりや抑又尙言はんと欲する所ありや

彼は眞に神州の美を信ぜり、吾人はこの一言を以て直に該演説のすべてを評せんと欲す、然ち彼は眞に神州の美を信ぜり故に彼の一言一句は咽喉から上の產物に非ず、徒に顔面朱を注いで草を叩くの類に非ず、其の説く所其の叫ぶ所必ずしも聴者をして首肯せしむるに足らずと雖も然も其の熱誠を看取せしむ、聴衆

は往々にして演者の所説よりも寧ろ其の熱誠其の人格に感ずること尠なりとせず、本演説の如き更に一步を進めば當に後者に庶幾からむか、言語の修鍊の稍もすれば飽きたらぬ感ありしが如し、例せば前半に於て山水の景を叙するに富士山を形容して「彼の玲瓏自品の如く千古變ぜざる皚々たる白雪を戴き萬嶽を睥睨し巍然として東海の天を塵する芙蓉峯」といふが如き又耶馬溪を叙するに「彼の急湍巖にむせんでは瀨となり瀧となり淙々たる水聲翠なる山に響き蒼然たる深き淵には大魚激湍として躍り……」といふが如き文章としてはいざ知らず口より耳に傳ふべき言語としては今一應の修鍊の餘地あるを信す有体に云へば山水の秀美を口にて表はさん程六ヶしきはなし、況や演説に於てをやたゞ何かより以上の工夫あるべきを云ふのみ、又仁德帝の御事を述ぶるに當り「萬葉の君の御頭に雨の濡る」と云々」といふが如き多少滑稽の感を抱かしむ、

演説の三分の一ばかりまでの所にやゝ輕卒なる態度を示したるは吾人之を惜しむ、たゞ是が爲に笑聲起るべき筈なき所再々笑聲を聞くに至りたり、是聽者笑聲を爲したる乎演者笑聲を招きたる乎但し論一たび題に入るや満場また些の亂雜なからしむ、正に演者の技也、

神來此類の演説は聽者をして感動せしむるの多きに反し動もすれば其の論する所感情のみに走せ其の退いて考ふべき或物を全く欠如する嫌なしとせず、例へば酒の如し、其の人をして酔はしめ舞はしめ歌はしむる其實に酒の力也、然も醒めての後、人は果して酒に何物を得しか、若し吾人をして卒直に言を致さしめば吾人演者其間にて彼は彼の所論の他の半面を見たりやを問はんと欲す、青年の腐敗は二十世紀の新産物に非ず、總じて青年間に於ても青年は正に腐敗しなりと、華奢風流或は近代に勝れるを相見せんとはあらず而も

其の腐敗の間より多くの稜々たる氣骨の士、豪宕なる偉材の器は出でたり。世は明治に移りたりと雖も華奢
 輻侈の風登に國士が風骨を犯すを得んや。腐敗裡にあるも國士は依然として國士也、天下の事由來二三の首
 領の士あらば足る、何ぞ凡百の輕薄輩に倚るを要せむや。演者請ふ徒に噉々を弄して他の半面あるを忘る
 勿れ、

酒酌演説はたゞ一時の拍手喝采を贏得するのみ、吾人はより以上のエトワスを求めんと欲す。但し望
 蜀のみ、若し夫れ演者にして「この演説は鬱懷の破裂のみ」と云はゞ吾人はたゞ笑つて默せむ、

第四 席

競争と進歩 (三十二分)

三部三年 合屋 友五郎君

「競争演説會といふ事から目頃考へて居りました競争の事について陳腐の説を吐かうと思ひます或は少しで
 も取る所があれば非常の光榮と存する次第であります、

「一体人間はどうしても現在に満足して居つてはいけないどうしても現在の吾より更に進歩しやう向上しや
 うといふ心懸けが必要であると思ふ單に知識の上のみでなく品性の上にも又身体の上にも更に進みたる吾
 に達しやうと務めねばならぬ 如何なる人も恐らくは皆進歩を願ひ退歩することを嫌ふであらう蓋し
 これは人情であると思ふ

更に曰く偉人は何等人と異なる所なし只彼等は進歩を希ふ点に於て他人よりも秀でたり若し人にして自己の
 事成に甘んずることあらば彼は己に進歩を停止したる也否退歩したる也驕氣は必ず惰氣を伴ふ桶狹間の一戦
 之を示すにあらずや、學生としては親愛なるクラスメートを敵として國家としては他列國を敵として更に

個々として周圍の誘惑を敵として人世の戰場に於て猛烈なる戰士たもざる可からず、吾人は右偉人の謙虛に就き大膽に學ぶ所ある也。例へば、
爾後のエーレンが自ら重力の大發見をなして實に百世科學界の宗祖たるに拘らず學海は實に茫々測り知るべからず己は唯海濱に於て數片の貝殻を拾ふたるのみと云つた。又近くは進化論の首唱者として知られるオールドウィンが實に世界をも震撼せしめる様な新生面を生物界に開いたにも拘らず一貧書生と何等異なる所なく勉學に倦まぬといふ様な事は實に吾人が景仰せざるを得ない所である。さて進歩を求め申せども我々が全体人間は奮勵努力さへすれば善い結果が生ずるのであるかといふ事は考へ物であらうと思ふ進歩心より向上發展しようと思つても中々さう甘く行くものではないそこで吾人は進歩に就て大に考へを要するのである。たとへば鐵砲の彈丸ばかりあつても的に命中することが出來ぬ様に其原因が結果に達する仲間には立つて之に力を與へる所のものがなくてはなりません。假に之を力を與へるといふ意味で與力を申して置きますやう。

斯くて演者は明治維新を舉げ當時の世狀を説き山縣大貳頼山陽蒲生君平等を中心として維新の原因那邊に存せ進歩を尋ね次に王政復古の所謂與力として浦賀の砲聲を指摘し腐敗危殆に傾ける幕末の世態は攘夷といふ與力によりて遂に維新の大業を遂行したりと論ず

大分例が長たらしくなりましたが私が申す進歩の原因は即ち向上發展の大なる希望と勉強とであります然るにこれにも必ず與力があるに違ひない茲に於いて私は日本國民が相互に最も激しき競争をなすことを主張する者であります即ち知識の上にも品性の上にも体力の上にも他人に決して劣らぬといふ競争心の最も

競争を説くは尙道學者先生に孔孟を説く一般ならむ、而も其の内容に於て清新の意味を含ましめたらばいざ知らず演者の口唇を突いて出でたる演説に何等清新の閃なし、滿腹の人に更に一碗を強ふるは鮮菜鮮汁の力也、而も平凡の論にも決して清新の意を寓する能はざるの理なきに於てをや、云はすや眞也故に新也と。
演者にゼスチユアありき 語勢に抑揚ありき、然もそのゼスチユアも其の抑揚も往々演者と離れて存在する様に見受けられしは惜むべし、演者は須らく演題と一致せざるべからず、一致して後始めて身振見るべく抑揚聞くべく熱誠受け取らるべし、要は演題を眞に信する乎否乎に在り。

更に演者に不得策なりしは彼が石田君の熱誠演説を受けて立ちたることはなり、聴衆は少なくとも前辯士の怒號によりて其の腦細胞を擴大せり、其の擴大未だ收まらざるに演者の温健の論を聞く例へば熱湯の後の微瀉湯の如し、彼等が精神の弛緩を感じたる故なしとせむや、殊に演者が論旨の一例として維新史を説きたるが如き例令其の引證が的確なりしや否やをこゝに論ずる自由を有せざるも其のあまりに長たらしくして聴衆の弛緩に一層の與力を與へたるは吾人の認めざるを得ざる所也、材料の取捨に一層の注意を促す。

其の順位に於て不得策也、其の演題に於て不得策也、演者は其の未だ昇壇せざるに先だち多くの不得策を具せり、唯吾人は清新の二字を以て彼に期せしに彼は期待に反せり、清新を求めて得ざりし乎、或は又誤つて之を忘失せし乎、たゞ演者に於て最も愉快に感じたるは体力の増進を説きしことは也、三部的抱負の中に髣髴す、若し出来得べくんば各部共更に以上の各部的特色を發揮して其部の爲に抱負を吐き氣焔を吐きては如何、未來の工業家の工業政策、未來の農學者の本邦農業論好個の題目たるに非ずや、演者が期せずして体力論の一端を吐露したりや將た期して然りしやを知らずと雖も是人によりて是の論を聞き得たるは吾

人の快とするところ也

第五 席

世界政策と東洋 (二十七分)

一部三年甲

宮本義典 介 君

龍南演壇の老將滿場注視の間に起つ。君や平日外交演説に其名を博する者、今や這個の演題を提げて起つ必ずや吾人が期待に背かざるものあらむ。態度既に堂々、冒頭先づ「誤り撰ばれて辯士の斑に入る。願ふは諸君の叱正を仰ぐ次第であります」と述べ直に本題に入る。

演者は先づ世界政策によりて東洋の形勢を論せんとて十五世紀以降の世界の形勢を歴史的に略述し大勢の東漸より東洋に於ける世界政策の足場の一として波斯を挙げ波斯に對する英露獨の態度を叙し波斯問題の低氣壓の波動は歐州の天地を襲はんとするに至つてこの問題が世界政策上如何なる地位にある乎思半ばに過ぎるものあらんと叫び、演者の眼光漸くきらめき熱誠漸く加はる。

論旨一轉、彼は第二の世界政策の足場として清國を挙げ列國が清國に對する態度を述べ述べ來りて日清役後に至るや曰く

諸君、日清戰爭に於て帝國の遼東半島の領有は東洋平和に害ありてふ美名の下に壓迫的忠告を加へ來れる諸國は其口未だ乾かざるに所謂租借問題は水の低きにつく如く蟻の甘きに集ふ如く踵を接して來り占領に次ぐに占領を以てし哀れ東洋の大帝國をして亞弗利加同様に列強分割の悲運に陥らしめんとしたのである論は轉じて米國の東洋に對する秋波となり世界の視聽盡く東洋に集中されたるに東洋の老大國たる清國は何を爲さんとする乎を怪しみて曰く

諸君清國の内情を見られよ、彼等は時勢の要求に餘儀なくせられて所謂各種の改革を實行し所謂立憲準備を進め所謂責任内閣を起さむとする者あるも而も彼等や世界の大勢を餘所にし兄弟鬩牆の愚を演じ内憂外患を自ら招きの狀あるに至つては吾人は清國の將來を中心より憂へざるを得ない、若しそれ英軍は雲南に侵入し露兵は伊犁を扼し加ふるに滿州の黒死病は城下の盟をなさしめんとするものありて前途の暗澹なるを悲しまずんば得ないのであります。

演者の熱誠益加はり、ハンカチーフを以て額の汗を拭ふもの數たび。彼の論鋒は再轉して吾邦の東洋に於る地位に及びぬ、

日露戦争に吾人が特に決戦を叫ぶ所以は東方侵略に腐心せる露國をして全然滿韓の地より驅逐して歐州の勢力平均に大革新を與へた現象であります、爾來世界的大事件は一として直接間接に日露戦争に關係せざるはなく帝國は戰雲收つて五年の後即ち昨年を以て東洋平和の爲め且は一千二百万の蒼生の爲め鷄林八道を合併するや此に大陸の一部に新領土を有するに至つたのである、而も諸君、喬木は風に憎まるゝを免かれませんが、日露戦争以來帝國が世界列國の嫉妬猜疑の中に包圍せられて國交の困難を感ずるに至つたのみならず或は不合理な壓迫或は取止めもない中傷説に苦められ往々不慮の災害を受くるは他なし帝國の地位が高まり帝國の勢力が加はるに伴ふ現象である、吾人は其大を認められた点に於て中心の愉快を禁じ得ない、若し夫れ上下一致以て義勇公に奉ずるの急なる今日を措て他にない、内に顧み外に鑑みて國民の自覺を要するもの一二にして止まらない、

彼は滿州租借期限の終了の近き將來に存する事、パナマ運河開通後に於る兩洋の關係、同文同種共に東洋を

蘭邦すべし。清國の輿論の動搖、濠州印度に於る排日運動等の諸事件を提げ來りて國民の自覺に促し、更に
ナ。運河開鑿後の吾邦の位置を論じ來り鐵案を下して曰く

然り吾人は太平洋の大は以て日米の兩立を許すに餘りありと云ふに斷然反對する者である、此時代に當り
て吾人は太平洋を以て帝國の湖水たらしめなければならぬ

急襲の如き拍手は忽ち満場に満ちぬ。聴衆は熱せり、演者更に熱せり

諸君東洋の大勢を見られよ、米獨露の各が飽くなきの貪婪を以て清國に接迫しつゝあるに際し米國頼むべ
じ獨乙依るべし米清同盟すべし米獨清同盟すべしと叫びて米獨の極東政策が日清兩國を離間し以て各孤立
の地に立たしめんとするあるを知らざる其の愚や誠に可憂である。

諸君六國を滅したるは六國であります、ポーランドを亡ぼしたるはポーランドであります、波斯を滅すは
正しく波斯人である、清國を亡ぼすものは豈列國ならんや殷鑑遠からず此くてグレートブリテンが亡びナ
ポレオン亡んだのである

彼はモンロー主義に代ふるに東洋主義を絶叫して曰く

吾人東洋の將來を深く憂ふるに當りて曰く「歐米諸國にして東洋に對し一指だも染むるものあらば正しく
東洋の平和及安寧を害するものである吾人東洋人は舉つて之に抵抗する覺悟を有す」といふ東洋主義を絶
叫する者である、

黄色人種は東洋に於て大なる役者也 然も實際に於る黄色人種は如何 曰く

美勢を憂ふるものは唯帝國あるのみである。東洋の運命を左右し得るもの唯帝國あるのみである第二の波

蘭土たる波斯、第二のアフリカたらんとする清國、第二の太平洋たらんとする太平洋是等を開發し指導すべきもの唯帝國あるのみである、東洋諸國否黃色人種の霸王たり盟主たるもの唯帝國あるのみである第三のモシロ第二のカブール第二のビスマークは我國民より出でなければならぬ、吾人の拍手は再び場を揺かせり、演者はすでに彼が欲する如く云ひ去れり、彼は今や結論に達せり。人々の努力めよ而して大に自重せよ、國家の盛衰は吾人青年の双肩に懸るのである。國運の隆盛は吾人青年の努力に待たなければならぬ、吾人は旭の御旗を翻して旭日東天に輝て萬邦其光を仰ぐ如からしめねばならぬ、東洋の文明を調和し世界の平和の指導者となり世界人道の擁護者となるは誠に我國民の理想である、是實に日本帝國の天職とする所であります。

諸君！男子と生れて此大責任に當る壯と云ふ可く快と云はざるを得ない、吾人はかくて六千萬の同胞の信頼を負ふて國勢の發展に幾分の貢獻を期するものであります。

拍手聲裡に演者は降壇せり、龍南演壇の宿將は實に吾人が期望を空しくせざりき。

○吾人は彼に理想的演説なりとの讃辭を呈する者にあらず、彼に欠点あるを認む、例せば無用の所にセスチキスを濫用するが如き、フルストツプの際に頭を前に動かすが如き何れも彼が有形的欠点たらすんばあらずされど其の音吐の朗々として滿場に徹せる、其の風姿の堂々として聽衆を壓したる、其の言語の明晰にして明瞭なる可解を與へたる、吾人は遂に其の比を見出す能はざる所、若しそれ紛糾錯雜然らずんば一種の年表朗讀に終らんとする歴史的記述を説き來り説き去りて聽者に一点倦怠の感なからしめたるに至りては殊に吾人其の聽者に對する一種の妙技として敬服せむとするところなり。

人然れども吾人は演者のみを賞讃して其の演題をれ自身がすでに聴者に或る物を與へたるを忘る可からず。世界政策の語既に衆多の注目を引きけるに其の世界政策は東洋にありと説き其の中心は日本也と叫び太平洋賦之を日本帝國の湖水たらしめざる可からずと絶叫す、而も満場の大半は青年學生也、彼等が演者の片言隻句を歡迎し拍手したるは演者の技なりとは云へ既に演題其者が彼等の興奮性に適合したる事も亦與つて存す然り演者の大成功の三分の一は之を演題に感謝せざる可からず。演者首肯するや否や其の演題の演じしや○吾人の第六席に自覺と苦悶(三十八分)

第一部三年甲、横手、貞武君

其の演題と其の演者の名の呼ばるゝや聴衆は起ちて拍手し喝采せり、一は彼が本會最終の演者たりしが爲に。然して他の一は聴衆のすべてが彼に多大の期待を寄せしが爲に。

登壇劈頭人類の歴史は自覺せんとする苦悶史也と喝破し以下滔々數萬言説き去り説き來りて人をして應接に暇なからしめ吾人遂に筆を投じて噤然たり。唯其の梗概と要点とを録するのみ、演者の言調をそのまゝ表はさずして其の一斑をも描く能はざりしは吾人の深く遺憾とし且つ演者に其罪を謝せざる可からざる也、以下其梗概とす、

人類の歴史は自覺せんとする苦悶史也、使徒ペテロが叫びたるクオバジスの語之を如何せん、人形の家に於る如く現代人は苦悶せり。現代の宗教や哲學や科學や果して吾人に何等かの權威を有せる。時代の宗教家より教義教禮を喋々するも是れ遂にパンの爲めのみ人を熱せんとせば已れ先づ熱せざるべからず蠢然にざるべからず。過去の宗教家が有せし超人的熱烈何處にある。次に哲學亦然り彼等は唯哲學史を認識論に

書に盛稱大猿同祖論を叫び、記者曰く此の間に演者は此等新科學者の主張を一々例證せしも大体に影響なれば略しぬ。宗教家は彼等を無神論者として攻めしも時勢既に法王の黄金時代に非ずガレリオ、ブルノーを迫害したる如き不合理なる暴動は遂に起る能はざりき。一進化論と共に吾人は進化論の雷同者あるを忘るべからず、彼等靈魂等形而上の一切を忘却し之によりて消極的苦悶を招けり。ニヒリズムもここに生れぬ、デカタニズムもここに生れぬ、吾人固より之を批評も同情せんとするも其の自暴自棄なるに於て決して採るべきなきを信ず。

之に對して積極的苦悶は起れり、古代憧憬論其一也、カーライルが樹脂性又は硝子性の電氣を以て彼の雷電霹靂に非ずと云ひしが如きこれに屬せずや。傳説の合理的解釋其二也、スベンサーが云へる分化化合の法則を示せりとするものは是に屬せずや、狂哲學其三也、ニイチュの一派之に屬せずや。如上進化論に對する苦悶の聲也、吾人亦進化論に對して絶望せざる可からざる乎。

假令人類は他の動物と其祖を同じくすとも人類は動物の勝利者也。勝利者たるの誇は實に人類眞自覺の第一歩也。然り吾人は進化論に何等絶望なきのみならず更に進んで遂に超人の可能を思はざるを得ず。

超人を不可能と駁するものよ、乞ふ之を過去の歴史に見よ、一林檎の落ちしを見て遂に學界の大發見をなしたるニュートンは如何、刀杖瓦石の間に妙法五字の旗高く堂々獅子吼せし日蓮は如何、炎々たる火中に坐し安禪何必擇由水滅却心頭火亦涼と叫びたる快川は如何、彼等皆超人にあらずや吾人其他一々の舉證に其の數多きを苦しむ、超人を不可能なりとする者よ、超人果して不可能也とする乎。其時、時代より超越せしニュートンゲーテの如き、死生より超越したる日蓮快川ジャンダークの如き吾人

が到達の目的たらざらむや超人は老莊の所謂至人。靈の自覺そこに超人あり、天然外物は拘せざるそこに超人ありパンの問題を超越するそこに超人あり肉の超越苦悶の解脱天上天下我は絶對的勝者たるを自覺せる處是實に超人の境涯ならずやコーランに我は神也と説き孟子に萬物皆具於我と云ふ、吾人深くこれを味ぶを要す、

人動もすれば曰はん超人は是れ心理的錯覺也と、錯覺と信する者をして信せしめよ吾人は堅く堅く超人の可能を信す。佛曰く殺佛戮祖と、儒曰く舜何人我何人、耶曰く求めよ而らば與へられんと、是實に超人に至る鐘鼓の聲也、叱咤の聲也、たゞ之を信する者よく彼の岸に達すべきのみ、
○あゝ自覺と云ふ苦悶と云ふ必竟は超人への段階のみ、肉と戦ひパンと戦ひあらゆる外物と戦うて意氣の益昂れる時天光一閃忽ち心耳を貫いて豁然眞の自覺に至る思はずや、眞自覺あり是に始めて事興るべき事行ふべき事成るべし、古來英雄の事實に超人によりて成る(終り)

○演者龍南の演壇に雌伏する久しく吾人今にして始めて壇上の彼を見る。彼が該博の識懸河の辯、殆んど吾人が期待に背かず、彼や努めたりと云ふべし、乞ふ二三妄批あらしめよ。

○宮本前演者の後を受けて立つ、前演者によりて熱せられたる聴衆に冷却を感ぜしめざるは彼の技の如何による、彼は喝破叱聲直に語を起す、これその此處に見る處ありて然りし也、されど語調やまもすれば激烈に陥りスビヤ動もすれば速きに失し、注意すべき句も一言に云ひ去り聴者をして其の言意を捕捉し難からしむ聴者が往々にして演者の語勢や身振に氣を奪はれその何を叫びつゝあるかを察知する能はざりしは本題の内容にもよるべけれど一は演者の如上の態度に因す

大議論を短時間に言ひ盡すは或る一點を提げてこれを繰り返し／＼説破するよりも聴者をして其の内容を了解せしむること難し。本題の如き確かに其前者に屬す、其の人類の自覺より超人を説くに至るや優に長大篇を爲す之を一々了解せしむるには最も材料の選擇排列に意を用ひざるべからず。演者果して意を用ひたる乎、吾人の見を以てすれば動もすれば根本を離れて枝葉に其の例證事實を列舉せしが如き感をもせしむる吾人は其の該博の識があまりに引用せられし爲全体に於て明白を欠ぎし感あるを憾む、大雄篇も其の剪裁に十分ならずはまた何をかせむ、

演説に關する演者の用意態度に就ては如上の外別に批難すべきなく天晴龍南演壇に於る彼の雄辯は吾人を示したるに拘らず其の演説の内容が聴者に明確の觀念を與ふる能はざりしは一にその内容の性質による、演者が今一層ポビュラーなる演題を以て立たば或は今一層の成功を收めたるや未だ保すべからざる也。されど演題の撰定は演者の絶對的權限に屬し一切の容喙を許さず。吾人はたゞ一言を叙するに止めむのみ。注意。以上六人の各演説の内容は本文の記者が之を剪裁して其の要點と思はしきを排列せし也、紙面に限りて或は其の全体としての明白の了解を欠ぎし點なきを保せず、これ記者が不注意の致すところなり。讀者願くば累を演者に及ばす勿れ。

吾人は其の各人に就て多少の妄評を試みたり、演説に於ては純然たる門外漢、固より妄評のみ、唯其の内容は就て二三の言なき能はざるも要するに各人異様の意見は公平の眼を以て之を見れば異なる立脚點に於て異なる觀察のみ、然り異なる觀察のみ、決して之を誤れる觀察とは爲すべからず。人の説の異なるや猶も

の面の異なるが如し、況や僅々數十分間の演説に其人の眞の抱懷を吐露し盡すを得べしとも覺ゆるや。吾人は一場の演説に表はれたる演者の思想の一片を捕へて彼に肉迫するの愚を學ぶ者に非ず、たと各人壇上の所論が演説と聴衆との關係を如何に作用し得たる乎を評するに止め居けり。演説の内容を批評するは全く不可能なるを知れば也。

吾人の感ずる所を直言せん乎、吾人は演説を以て全能となす能はず、演説は手段の一也、沈黙は金也の一言必すしも一面の眞理たらずんばあらず、若し默せば則ちやむ、而も一旦默する能はざるの秋あらば宜しく熱誠あるを要せずや、熱誠は必ずしも慷慨激越の言のみにあらず演者にして一片の熱誠あらば期せずして彼の片言半句に表はれん、熱誠なき若しくは熱誠を披瀝し能はざる演説は動もすれば傾聴の義務を人に感ぜむむ、理想を云へば諸君の衷心の感懷を洩らされむことを希ふ、もし理想して不可能なりとせば諸君の衷心の感懷に近きものを吐露せられむ事を希ふ、今日の演題中當然人を動かすべきの人を動かす能はざりしは或は熱誠の欠如に依るならむか、然れども翻つて考ふるに競争演説會とは一種の義務演説會也、義務に熱誠の伴ふこと比較少なきは事實なり。此間の調和吾人はたゞ諸君に待たむ、

難き哉演説の優劣を定めむ事や。審査員諸氏あり吾人何等の言を挿む可からずと雖も何を標準とし甲乙を定むべき乎、是れ至難中の至難たらずんばあらず、吾人は先づ其の演題に注目せざる可からず、聴衆に適否とすと否とは演題の如何と多大の關係あり例へば舟夫の水に溺りて掉し或は流に従て下るが如し、演題が聴衆は感興を與へたるものは壇上の辯論比較的容易なるべく之に反せるものは比較的困難なるむ、演説其責にづきて等一の技を有せる人も其の演題によりて或は優となり或は劣となるの必ずしも絶無とは云ひ難し、但

當然人を動かすべき演題にして何等人を動かすことなかりしは其罪確かに演者其自身に在り。其次に聴衆の何者たるかを尋ねざるべからず、今夜の聴衆には何かを求めんとして來る教會參りの性質なぐ又演説の内容を批評せんとして來りし者もなかるべし、要するにたゞ土曜の一夜を演説聞きに過ぎん位の外無意義に集まりし者のみ、故に面白ければ耳時て聞かむも面白くなきに至るや欠伸や居眠や退去や自由勝手たる也、固より演説の意の那邊にあるかを求むるの必要も義務もなし、斯る聴衆相手に演者の眞正の氣を吐かんとす亦難いかな。

吾人は最後に各部競争演説會は果して成立し得べきやを疑へるを告白す、競争の最大要素は其の各撰手が果して等一の資格を備へたる乎に存す、而るに事實上演説は殆んど一部の専有に屬し現に演説部委員が一部以外より撰舉せられし如き事の稀少若くは皆無なるによりても既に之を立證す、即ち二部三部の諸君が演説に對する感興は一部諸君よりも薄く而も感興を有せる人の少なきは掩ふ可からざる事實也、尤も雄辯の太皆無には非るべきも吾人は寧ろ稀少の例として之を論するの必要を認めず、事實既に斯の如し、而も此間より撰手を出して一部と對抗せしむ、一は演壇上修鍊の老兵也、他は動もすれば演説練習に事欠げ勝ちの人也、假令後者に多大の天才あらむも彼我或は其間に何等かの差違なきを保し難からむ、況や前述の如き隠れたる數個の遠因近因ありて其の優劣審査に紛乱混雜を來すをや。吾人は實に各部競争演説が眞の意味に於て成立し得べき乎を疑ひ、更に歩を進めて優劣果して評價し得べき乎を疑ふ。

若し必ずしも優劣を分つの要あらば審査員諸氏の在るあり請ふ諸氏に一任せむ、吾人をして云はしむれば優劣決して分つ能はざるを知るが故に吾人は優劣の評價に一切の權威を認むる能はず、唯だ撰手諸君が其の

勞を禪されそのベストを致されたるを信じ衷心の欣快を以て筆を擱かんと欲す、妄評たゞ謝するに語なきの
み(終)

序言、審査の結果は演說部報欄に出て居ますから知り度い人はそれを御覽下さい演說の間々に奏せられた
蓄音機は内田時計店の好意に出たものだそうです、厚く御禮申して置きます

一体どんな主義でも、思想でも、其意味を強く、新しく感じ、其の議論の前提から論理的に結論を演繹したらば危
険に思はれないものは殆んど一つもありません。しかし千人の耶蘇教信者の中に故なく右の頬を打たれ乍ら平然と
して左の頬を向ける者は殆んど一人さへある事を豫期せられない様に、人間は其信仰した主義とか思想とか云ふも
のを直に行に現はすものではありません。人間の生活は主義とか哲學とか云ふものよりも、もつと複雑したもので
ありますから、其主義や思想も實際の生活に入れば多くは軟和して中性になるものであります。實は此点に人は其
の說なりも贅しと云ふ面白い味があるのであります。

——山路愛山——